

PRESS RELEASE

新国立劇場 2024/2025シーズン 演劇

シリーズ「光景—ここから先へと」Vol.2

ザ・ヒューマンズ—人間たち

これはホラーか、コメディか？全編に“気味悪さ”をまとった、異色の家族劇
A24製作により映画化もされたスティーヴン・キアラムのヒット作、待望の日本初演！



(上段 左から)山崎静代、青山美郷、細川 岳
(下段 左から)稲川実代子、増子倭文江、平田 満



翻訳
広田敦郎



演出
桑原裕子



芸術監督
小川絵梨子

2025年6月12日(木)～29日(日) 新国立劇場 小劇場

2025年4月12日(土)10:00～ 一般前売スタート！

【写真・資料のご請求、取材のお問い合わせ】

新国立劇場 制作部演劇 広報担当 杉田亜樹

TEL: 03-5352-5738 FAX: 03-5352-5737

E-mail: sugita_a8863@nntt.jac.go.jp

〒151-0071 東京都渋谷区本町 1-1-1



作品について

**感謝祭の日、マンハッタンのアパートに集まったある家族の一夜の物語。
彼らの抱える“不安”と、その不安を増長する数々の“怪奇現象”——
観るものの予想を裏切り続ける、「家族ドラマ」という枠にはまらない傑作！**

家族が織り成す様々な風景から、今日の社会の姿を照らし出し、未来を見つめるシリーズ「光景—ここから先へと—」の第2弾は、劇作家・脚本家として活躍するスティーヴン・キャラムのヒット作、『ザ・ヒューマンズ—人間たち』。マンハッタンの老朽化したアパートを舞台に、感謝祭を祝うために集まったある家族の会話から、貧困、老い、病気、愛の喪失への不安、宗教をめぐる対立などが浮かびあがる一夜の物語です。だんだんと吐露されていく彼らが感じている様々な不安。人間の抱える人生の大きな不安を描くこの物語の世界は、現在のアメリカの縮図であり、それは私たち日本の現在とも重なります。

2014年アメリカン・シアター・カンパニー製作によりシカゴで初演され、15年ラウンドアバウト・シアター・カンパニー製作によりニューヨーク、オフ・ブロードウェイで上演、16年にはキャラムのブロードウェイ・デビュー作となり、再びピュリッツァー賞演劇部門最終候補、トニー賞、ニューヨーク演劇批評家協会賞の最優秀プレイ、オビー賞劇作賞を受賞しました。

続いて21年、キャラム自身が監督を務め、映画化も果たしました。製作・配給を手がけたのは、「ムーンライト」「エブリシング・エブリウェア・オール・アット・ワンス」などアカデミー賞受賞作を連発している「A24(エートウエンティフォー)」。リチャード・ジェンキンス、エイミー・シューマー、ビーニー・フェルドスタイン、スティーヴン・ユアンらが出演し、高い評価を得ています。

そしてこの度、演出に、22年に上演した『ロビー・ヒーロー』の記憶も新しい、劇団 KAKUTA 主宰の桑原裕子を再び迎え、この新国立劇場にて日本初演いたします。

キャスティングには、観客が自分自身を重ねることができる当事者性を重要視したという桑原。ブレイク家の長女で、ガールフレンドと別れたばかりの弁護士エイミーには山崎静代。作曲家を目指す次女のブリジットには、オーディションを経て出演が決定した青山美郷、その恋人・リチャードには細川 岳、認知症により車椅子生活をおくる祖母モモには稲川実代子、母ディアドラには増子倭文江、そして悪夢にうなされ不眠が続く父エリックを平田 満という多彩なキャストが揃いました。

家族ドラマというジャンルに、気味悪さ、恐怖という予想外の要素を混ぜ込んだ異色作。「こういう展開、こういう作品だろう」という、観客の予想を超え続ける緊張感のある展開に加え、家族間の一筋縄ではいかない関係性、ユーモア、そして深い愛が描かれています。どうぞご期待下さい。

あらすじ

——だって現実には起きていることだけで十分気味が悪いんだから

眠れぬ夜を過ごしているエリック(平田 満)は、感謝祭の日、フィラデルフィア郊外から、妻ディアドラ(増子倭文江)と認知症の母モモ(稲川実代子)を連れ、次女のブリジット(青山美郷)とそのボーイフレンド、リチャード(細川 岳)が住むマンハッタンのアパートを訪れる。そこに長女エイミー(山崎静代)も合流し、皆で夕食を共にする。雑多なチャイナタウンにある老朽化したアパートでは、階上の住人の奇怪な物音や、階下のランドリールームの轟音がして、祝日だというのに落ち着かない。そんな中始まった食事会では、次第にそれぞれがいま抱える人生の不安や悩みを語り出し、だんだんと陰鬱な雰囲気を持っていく。その時、部屋の照明が消え、不気味な出来事が次々起こり.....。

翻訳 広田敦郎からのメッセージ

とても定義しがたい作品です。一見サイエンス・フィクションかと思わせるタイトルでもあるようですが、どんなお芝居かは想像しにくいでしょう。

一家が集まる感謝祭のディナー、夜更けとともに浮かび上がる不都合な真実、と、いかにもくアメリカの家族劇らしくまとめることもできますが、それではあまりにも新しくないし……何も特別なところのない、ごく普通の家族の営みにほっこりしながら、そこはかとな不安にさいなまれ、「いま何を見せられたの？」と若干もやっとなしながら劇場を後にする感じの、怪談じみたお芝居、でしょうか。

『ハミルトン』がトニー賞ベスト・ミュージカルとピューリッツァー賞に選ばれた 2016 年、トニー賞ベスト・プレイに選ばれ、ピューリッツァー賞ファイナリストまで残ったお芝居です。バラク・オバマ政権が終わりに近づくころ、そしてまもなくドナルド・トランプが大統領に選ばれることを大勢が予想していなかった（あるいは予想していたでしょうか？）ころ、初演されたお芝居です。

19 世紀から 20 世紀の変わり目、チャーホフの新作劇を観た人々と同じような気持ちを味わえるお芝居、かもしれません。ニューヨーク、マンハッタン の片隅で感謝祭のディナーに集まった家族の抱える不安は、ポストコロナ時代の日本で生活するわたしたちにとっても他人事ではありません。劇場でひとよの不安を分かち合い、他者との緩やかな繋がりを感ずることが、この酷い時代、酷い世界を生き抜くための支えになればと思っています。

演出 桑原裕子からのメッセージ

人が、不安を抱くのはどんなときだろう、と考えていました。

幼い頃は、そこにはないはずの物がある、見えない者が見える、聞こえてはいけない音が……という、いわばゴーストのような未知なる存在に恐れ、何もない暗闇の奥に目をこらしていたものです。

けれどいつからか、不安はその逆にある、と感じるようになりました。

あるはずのものが無い。見えていたことを見失う。信じていたものが失われてゆく。それは、信頼であるとか関係だとか絆だとか記憶だとか愛だとか、自分自身であるとか。あるいは文化だとか、社会だとか。私たちの暮らしている世界は、永遠に進化していくものだと思い込んでいたけれど、そうではなかったのだなと、ここ 10 年ほどの間で急速に感じるようにもなりました。以来ずっと、足下に不安が漂っています。

失われていく予感こそが、不安の正体なのかもしれません。

『ザ・ヒューマンズー人間たち』は、ひとつの家族の、ほんの僅かな時間を切り取った作品です。あなたも私もよく知るような……けれど、我々が平気な顔をして日々を営みながらひた隠しにしてきた恐ろしい何か、が、不気味な軋みをあげて満ちてゆく恐怖劇でもあります。家族という小さな社会で蠢く人間たちを、私も足をすくませながら見届けます。

スタッフプロフィール

【作】 スティーヴン・キャラム Stephen KARAM

1980年ペンシルベニア州スクラントンでレバノン系アメリカ人の家庭に生まれる。ブランク・シアターの全国青少年劇作家フェスティバルで97年から99年まで3年連続優勝。2001年、ブラウン大学在学中、ミュージカル『エマ』でケネディ・センター・アメリカ大学演劇フェスティバルのミュージカル賞を受賞。大学卒業後、ユタ・シェイクスピア・フェスティバルで実習生として働く。12年、『預言者の息子たち』がピュリッツァー賞演劇部門最終候補となり、ニューヨーク演劇批評家協会賞、アウター批評家協会賞、ルシール・ローテル賞の最優秀プレイを受賞。『ザ・ヒューマンズ』は14年アメリカン・シアター・カンパニー製作によりシカゴで初演され、15年ラウンドアバウト・シアター・カンパニー製作によりニューヨーク、オフ・ブロードウェイで上演、16年にはキャラムのブロードウェイ・デビュー作となり、再びピュリッツァー賞演劇部門最終候補、トニー賞およびニューヨーク演劇批評家協会賞の最優秀プレイ、オビー賞劇作賞を受賞。その他の戯曲に、『桜の園』（チェーホフの翻案）、『ダーク・シスターズ』（室内オペラの作詞）、『スピーチ&ディベート』、『コロンバイナス』など。映画脚本に『スピーチ&ディベート』、『かもめ』（チェーホフの翻案／マイケル・メイヤー監督）。21年、A24製作による『ザ・ヒューマンズ』ではキャラム自身が監督も務め、エイミー・シューマー、ビーニー・フェルドスタイン、スティーヴン・ユアンらが出演、高く評価された。



【翻訳】 広田敦郎 HIROTA Atsuro

劇団四季、TPTを経て、フリーランスの戯曲翻訳者。2009年、トム・ストッパード作『コースト・オブ・ユートピア』の翻訳で小田島雄志翻訳戯曲賞。2013年、アジア・カルチュラル・カウンシル（ACC）グランティ。近年の翻訳上演作に、キャリル・チャーチル作『A Number - 数』、『What If Only - もしももしせめて』、サイモン・スティーヴンス作『広い世界のほとりに』、『FORTUNE』、ローレン・ガンダーソン作『Silent Sky』、チェーホフ作『三人姉妹』『桜の園』（サイモン・スティーヴンス版）、アーサー・ミラー作『橋からの眺め』『みんな我が子』『セールスマンの死』、テネシー・ウィリアムズ作『地獄のオルフェウス』『西洋能 男が死ぬ日』、ダグラス・マックスウェル作『OUR BAD MAGNET』、ダイアナ・ソン作『STOP KISS』、アレクシ・ケイ・キャンベル作『The Pride』、アンドリュース・ボヴェル作『これだけはわかってる』、カレル・チャペック作『母』。新国立劇場での翻訳に『レオポルトシュタット』、『母』（日本語字幕）、『ザ・ヒューマンズ—人間たち』。



【演出】 桑原裕子 KUWABARA Yuko

東京都出身。劇作家・演出家・俳優。劇団 KAKUTA 主宰。穂の国とよはし芸術劇場 PLAT 芸術監督。2009年 KAKUTA『甘い丘』で第64回文化庁芸術祭・芸術祭新人賞（脚本・演出）受賞。16年 KAKUTA『痕跡』第18回鶴屋南北戯曲賞受賞。18年穂の国とよはし芸術劇場 PLAT プロデュース『荒れ野』で第5回ハヤカワ「悲劇喜劇」賞および読売文学賞戯曲シナリオ部門受賞。19年に劇団作品『ひとよ』が白石和彌監督で映画化。映像脚本として、NHK 昭和歌謡ミュージカル『また逢う日まで』など。その他近年の主な舞台に『鯨よ！私の手に乗れ』（出演）『応天の門』（脚本）『演劇部のキャリー』（出演）ミュージカル『ナビレラ』（上演台本・演出）『たわごと』（作・演出）『少女都市からの呼び声』（出演）『誤餐』（作・演出）『閃光ばなし』（出演）などがある。新国立劇場では『ロビー・ヒーロー』を演出。

出演者プロフィール



山崎静代 YAMASAKI Shizuyo ————— エイミー（長女）

2003年、お笑いコンビ「南海キャンディーズ」を結成し M-1グランプリ 2004 で準優勝を果たし注目を集める。06年、映画『フラガール』に出演し第30回日本アカデミー賞新人俳優賞受賞。20年から日本ボクシング連盟女子強化委員を務めるなど、活躍は多岐にわたる。これまでの主な出演に映画『幽霊はわがままな夢を見る』『親のお金は誰のもの 法定相続人』『半径1メートルの君〜上を向いて歩こう〜』『エリカ 38』『ヒーローマニア 生活』、ドラマ『リラの花咲くけものみち』『プライベートバンカー』など。

【主な舞台】『山笑う』『徒然アルツハイマー』『BIRTHDAY』『おかしな二人』『雪まろげ』『マニアック』『ひみつ』『ターゆー』『ザ・オダサク』『ちんけさんと大きな女たち』『ゼブラ』など。



青山美郷 AOYAMA Misato ————ブリジット(次女)

2014年、映画『思春期ごっこ』で初主演。16年にはNHK『鼠、江戸を疾る2』でヒロインを演じる。これまでの主な出演に映画『ドクター・デスの遺産 BLACK FILE』『犬に名前をつける日』『TOKYO CITY GIRL』『人狼ゲーム ビーストサイド』『円卓』、大河ドラマ『べらぼう』、ドラマ『夫婦善哉』『潜入捜査アイドル・刑事ダンス』『定年オヤジ改造計画』『大江戸もののけ物語』『一億円のさようなら』など。

【主な舞台】『カリズマ』『ハザカイキ』『地獄は四角い』『近松心中物語』『渦が森団地の眠れない子たち』『新世界ロマンスオーケストラ』『危険な関係』『墓場、女子高生』『タンゴ・冬の終わりに』など。



細川 岳 HOSOKAWA Gaku ————リチャード(次女の恋人)

2014年、映画『ガンバレとかうるせえ』で役者デビュー。20年、映画『佐々木、イン、マイマイン』で第42回ヨコハマ映画祭 審査員特別賞、おおさかシネマフェスティバル2021 日本映画新人男優賞受賞。これまでの主な出演に映画『ミッシング』『ぬいぐるみとしゃべる人はやさしい』『ハウ』『愛うつつ』『ソワレ』『君が世界のはじまり』『泣く子はいねえが』、大河ドラマ『鎌倉殿の13人』、連続テレビ小説『虎に翼』『舞いあがれ！』など。

【主な舞台】『少女都市からの呼び声』など



稲川実代子 INAGAWA Miyoko ————モモ(祖母)

劇団菅間馬鈴薯堂の看板女優として、舞台をはじめ映画、ドラマ、CM など映像の分野でも幅広く活動。これまでの主な出演にドラマ『ルパンの娘』、連続テレビ小説『エール』、映画『雑魚どもよ、大志を抱け！』『ドーナツもり』『ダンシング・マリー』『譲られなかった者たちへ』『椿の庭』『一度死んでみた』『勝手にふるえてろ』『心が叫びたがってるんだ。』『百円の恋』『ハラがコレなんで』『ばけもの模様』『マルタイの女』『スーパーの女』など。

【主な舞台】1994 年から劇団菅間馬鈴薯堂の舞台のほか、『スメル』など。新国立劇場では『あーぶくたった、にいたった』『マニラ瑞穂記』『ノヤジルシー誘われて』に出演。



増子倭文江 MASUKO Shizue ————ディアドラ(母)

舞台を中心に、映画、ドラマ、ラジオドラマ等幅広く活動。2023 年、40 年在籍した劇団青年座を退団。近年の主な出演にドラマ『まぐだら屋のマリア』『それぞれの孤独のグルメ』、映画『お終活 熟年！ 人生、百年時代の過ごし方』などがある。『ボビー・フィッシャーはパサデナに住んでいる』『地の乳房』で第 22 回、『荒れ野』にて第 27 回読売演劇大賞優秀女優賞受賞。本年 12 月に二人芝居『請願』が控える。

【主な舞台】『フロイスーその死、書き残さず』『ストーリーボーイズ』『闇に咲く花』『博士の愛した数式』『GOOD BOYS』『頭痛肩こり樋口一葉』『奇跡の人』『母 MATKA』『CHIMERICA チャイメリカ』『砂塵のニケ』『をんな善哉』『闇に咲く花』など。新国立劇場では『楽園』『月・こうこう、風・そうそう』『ピグマリオン』『わが町』に出演。



平田 満 HIRATA Mitsuru ————エリック(父)

早稲田大学在学中、「つかこうへい事務所」旗揚げに参加。1982年、映画『蒲田行進曲』で第6回日本アカデミー賞最優秀主演男優賞をはじめ多数の映画賞を受賞。06年企画プロデュース共同体「アル☆カンパニー」を立ち上げ、平田俊子、青木 豪、蓬莱竜太、前田司郎、田村孝裕、三浦大輔、桑原裕子、野田慈伸など時代を担う幅広い作家・演出家と様々な試みに取り組んでいる。また芸術文化アドバイザーを務めた穂の国とよはし芸術劇場PLATプロデュース『荒れ野』では、企画、出演し、第5回ハヤカワ悲劇喜劇賞を受賞。最近の主な出演に、連続テレビ小説『虎に翼』、ドラマ『それぞれの孤独のグルメ』『柚木さんの四兄弟。』『エンジェルフライト』、映画『めくらやなぎと眠る女』『ひとりたび』『アンダーニンジャ』『ショウタイムセブン』など。

【主な舞台】『海をゆく者』『新ハムレット』『ハイゼンベルク』『ぼくの名前はズッキーニ』『POPPY!!!』『THE NETHER』『美しく青く』『星回帰線』『熱海殺人事件』『失望のむこうがわ』など。新国立劇場では『赤道の下のマクベス』『白蟻の巣』『シュート・ザ・クロウ』『こんにちば、母さん』に出演。

公演概要

【タイトル】 シリーズ「光景—ここから先へ—」Vol.2『ザ・ヒューマンズ—人間たち』

【作】スティーヴン・キヤラム

【翻訳】広田敦郎

【演出】桑原裕子

【美術】田中敏恵

【照明】佐藤 啓

【音響】藤田赤目

【衣裳】半田悦子

【ヘアメイク】高村マドカ

【演出助手】和田沙緒理

【舞台監督】川除 学

【芸術監督】小川絵梨子

【主催】新国立劇場

【キャスト】 山崎静代、青山美郷、細川 岳、稲川実代子、増子倭文江、平田 満

【会場】 新国立劇場 小劇場

【公演日程】2025年6月12日(木)～29日(日)

※開場は開演の30分前です。

【料金(税込)】

A席 7,700円／B席 3,300円／Z席(当日)1,650円

【一般発売】2025年4月12日(土)10:00～

【チケット申し込み・お問い合わせ】

新国立劇場ボックスオフィス TEL:03-5352-9999 (10:00～18:00)

新国立劇場Webボックスオフィス <https://nntt.pia.jp/>

* **Z席1,650円** Z席は、公演当日朝10:00から、新国立劇場Webボックスオフィスおよびセブンイレブンの端末操作により全席先着販売いたします。

先着販売後、残席がある場合は、公演当日朝11:00からボックスオフィス窓口でも販売いたします。※電話予約不可。

* **当日学生割引** 公演当日残席がある場合、Z席を除く全ての席種について50%割引にて販売。要学生証。電話予約可。

* **各種割引** 新国立劇場では、高齢者割引(65歳以上5%)、障がい者割引(20%)、学生割引(5%)、ジュニア割引(小中学生20%)、アトレ会員割引(5～10%)など各種の割引サービスをご用意しています。

【新国立シアタートーク】

日時:6月17日(火)終演後

出演:桑原裕子、全キャスト

司会:中井美穂

入場方法:本公演チケット(いずれの日程でも可)をご提示ください。

全国公演

【愛知公演】 穂の国とよはし芸術劇場PLAT 主ホール

2025年7月5日(土)13:00開演、6日(日)13:00開演

【大阪公演】 茨木市文化・子育て複合施設 おにクル ゴウダホール(大ホール)

2025年7月19日(土)14:00開演

目や耳に障がいのあるお客様への観劇サポート

本公演では視覚・聴覚に障がいのあるお客さまへ、観劇サポートをご提供いたします。

※サポートは無料。要予約、定員あり。

2025 年 4 月 12 日(土)10:00 より予約開始

目に障がいのあるお客様への 開演前舞台説明会 & リアルタイム音声ガイド	① 6 月 25 日(水)	14:00 開演
	② 6 月 28 日(土)	13:00 開演
耳に障がいのあるお客様への ポータブル字幕機の貸し出し	① 6 月 20 日(金)	19:00 開演
	② 6 月 21 日(土)	17:30 開演



劇場前の表示



受付には、手話通訳者と要約筆者も



開演前舞台説明会の様子



舞台模型に触って、形状を体感している様子

シリーズ「光景—ここから先へと—」作品

シリーズ「光景—ここから先へと—」Vol.1 海外招聘公演『母』



『母』舞台写真 提供:ブルノ国立劇場

まさに現在の世界情勢をうつしとったかのような演出で、2022年4月の初演以来、国内外で高い評価を得ている、チェコ、ブルノ国立劇場ドラマ・カンパニーによるカレル・チャペックの名作『母』。現在もレパートリー作品として上演している本作を新国立劇場にて日本初演します。

公演期間:2025年5月28日～6月1日

会場:新国立劇場 小劇場

作:カレル・チャペック 演出:シュチェパン・パーツル

出演:ブルノ国立劇場ドラマ・カンパニー

シリーズ「光景—ここから先へと—」Vol.3 『消えていくなら朝』



すべての出演者をオーディションで決定するフルオーディション企画第7弾。2018年に蓬萊竜太が新国立劇場に書き下ろした、家族と距離を置いていた劇作家の「僕」とその家族を巡る一晩の物語。最も身近で最も厄介な「家族」という存在を描いた本作を、蓬萊竜太自身が演出を手がけます。

公演期間:2025年7月10日～27日

会場:新国立劇場 小劇場

作・演出:蓬萊竜太

出演:大谷亮介、大沼百合子、関口アナン、田実陽子、坂東 希、松本哲也

<お得なセット券のご案内 >

シリーズ「光景—ここから先へと—」通し券
『母』『ザ・ヒューマンズ—人間たち』『消えていくなら朝』A席

料金(税込) 20,700 円

お申込先:新国立劇場ボックスオフィス 03-5352-9999
(電話と窓口のみ)

※3作品のいずれかが完売、または『母』公演が終了した時点で通し券の販売は終了します。